

追	憶
---	---

彼の事ごも

幼　　時

中村要の幼い頃についての一番古い思ひ出は、四つ位の頃、夕飯の時に、
『中に畫の描いてあるお茶碗で御飯を食べるのや』
と言つて駄々をこねて居たことがあつて、同じ年の従兄の私はそれを見て愉快に感じたことでした。

九歳か十歳の頃、二人で立關の式臺に足を投げ出して遊んで居て、ふと私は大變なことに氣がつかしました。それは、要の足が私の足に比べて二倍もある程、甲高で、頑丈なことなのです。比較的都會風に育つた私が、田舎育ちの彼に對して底知れぬ畏れといふか畏敬といふか、さういふ感を持つたのはそれ以來でありました。

中村家の屋敷は、田舎のことですから、二段歩近くもあつて、屋敷内に、(荒地同様ではありますが)、菜園があり、雞を飼つたり、一隅に孟宗竹の藪があつたりしてゐるのですが、或る春の日に、遊びまはつて、二人でその竹藪の中へ入つたことがありました。私は竹の子の生へてゐるのが珍らしく、づかづかと近づいて、太いのを二本ばかり、生えてゐる根もとから折つてしまひました。そして要と二人でそつと元の形に其れを直しておいて、又遊びまはつて夕方になりました。私が母に連れられて歸らうとした時、隣の子が知らせに來たので、竹の子の一件が忽ち露れてしまつて、私は青くなりました。要は呼びつけられて叱られてゐます。私は、じつと耳をすませてゐましたが、要は黙つてゐて、最後まで

『あれは庸夫さんがやつたのだ』

とは言ひませんでした。私は、心にとがめながら、ほつとして其の家を離れたのでした。彼が、幼い時から、立派な犠牲心に富み、辛抱強い心を持つてゐた事を思ひ出して、尊敬に堪えません。彼は、この尊い純情を、彼の死んだ最後まで

持ちつゞけたのであり、この純情のために死を早めたとさへ思はれるのです。

彼の研究心の芽生えの著しく表はれて來たのは 尋常五年生頃ではなかつただらうかと思はれます。歴史に興味を持つて、部厚い書物を二三冊も、あちらこちらひつくりかへして、一つの事件の因果關係を明らかにしやうと努力してゐたらしいことがあります。そして相當に自分で満足するだけのことをやつてゐたらしいのです。伯父が澤山に書物を買ひこんでゐたといふ關係もありますが、その頃の田舎の兒童が、一人の指導者もなしに、あのやうな傾向を持つて居たといふことは、注目してよからうと思ひます。

近　　時

ここには、彼の死にあまり關係のない談話を二つ三つ記しておくに止めませう。

『どうして頭を使ひますか。いつも姿勢を正しくしてゐるとか何とかいふやうなたしなみはありませんか』

『そんなことは何もありません。私の頭はおかしなことがあつて、いつも一つのことをしながら他のことを考へてゐます。一事に心を集中してゐるといふやうなこともないやうです』

以下彼の話……………

『大學といふ所は妙な習慣があつて、人の研究してゐることを他の人は少しも知らないのです。たとへ間違つたことをやつてゐても他からは何も言つて呉れません。だから一人でとんでもないことをしてゐることがあつたりします。知らうともしませんし隠さうとしてゐるのでもありません。他の教室でも皆さうらしいのです。先生だけは時々注意をして下さいます。』

『高等學校を経て何の考へも無しに大學の天文科の方へ來た人は、そんな關係で全く困ります。誰一人何をやれと言つてくれる人が無く、皆自分のことだけをこつこつやつてゐるのですから、半年位は何一つ手がつけられずじやんやり暮してゐる人もあります』

『大學を出た人が身體をうごかせてくれるとよいのですが』

彼は全く食事の時間も惜しんで動いたらしいです。他に趣味めいたことは何一つなく、時々郷里へ歸つて『働きすぎたから』と言つて、離れ座敷で二/三

日もぶつ通しで寝ることもあつたやうです。近所の大根畑や菜畑の間を、朗らかに口笛吹きながら、無帽で歩いてまはつたり、一里半程離れた山村の叔母の家へよく遊びに行つたりしたことが、仕事のほかでは一番楽しかつたのでせう。人から寄せられる御好意を喜んで、よく旅行先の話等をすることもありました。

彼が不眠と眼の異常を訴へ出したのは、先づ、この四月頃からであります。彼の死後、彼が自分の着るもの一つ着ないで、人知れぬ苦勞を重ねた生涯の全貌が漸く分つて来るにつけて、人間として稀なる彼の純情に今更ながら頭が下る氣がします。

彼の死相は實に安らかでありました。

昭和七年十一月十五日 庸夫記

故中村要氏の英靈に捧ぐ

神戸市關守畔 改 發 香 場

次頁の寫眞は中村氏が心身の勞苦を惜まず、二ヶ月餘の日數を費やして製作して下さつた寫眞玉によつて撮影した最初の星野寫眞であります。生前氏は未だ此の寫眞玉によつて撮影した星野寫眞は一度も見て居られない、氏自身にも一度として星像の試寫すらして居ないと言はれたから、此の印畫を氏の英靈の前に捧げます、立派な出来ばえは獨り私だけの喜びに止まりません。深く感謝の意を表します。

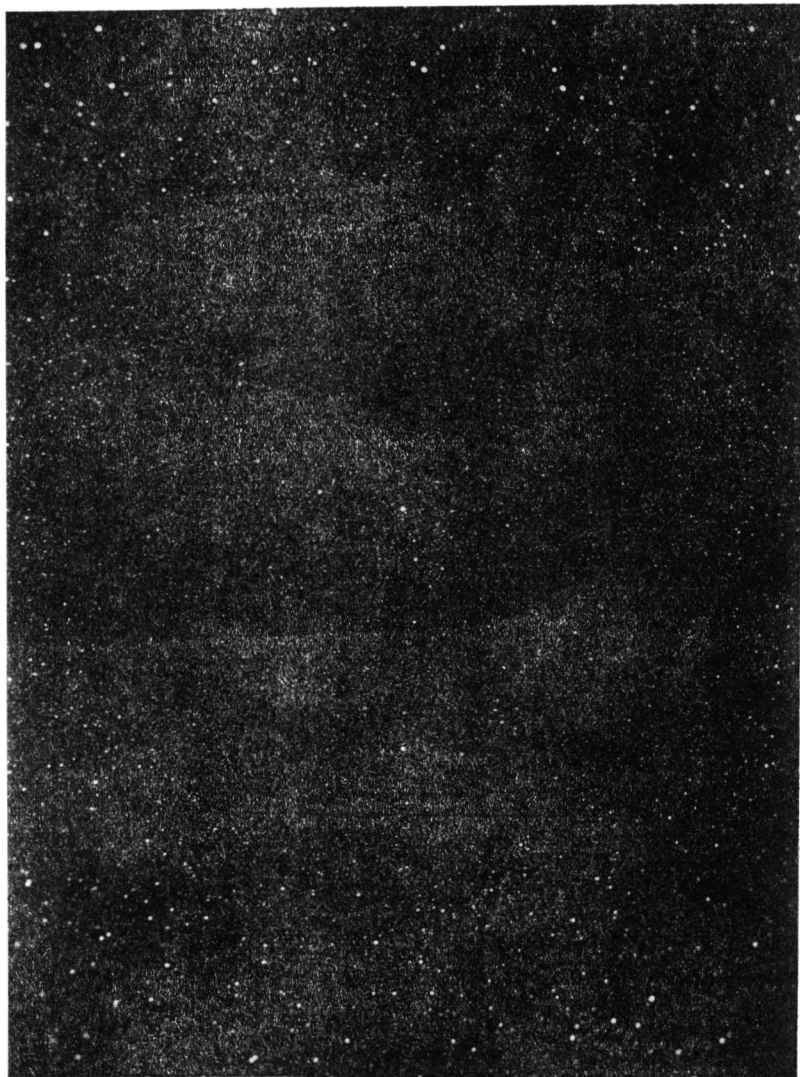
日附	1932年. 10月. 1日	19時 7分より
		21時 15分まで
露出	115分.	位置 狐座 29番星
柱 西	雲量 零,	乾板 イー ストマン40

附 記

四枚玉 133 mm 口径の寫眞玉の製作は氏自身にも初めての事であるので、充分の自信は持つて居られたが、又一面には初めての事でもあるので可也に不安も多分に持つて居られた。此の事は氏から戴く音信文に屢記載されて居

たものです。着手當時は $f5$ の豫定であつたが、出来上つた結果は焦點距離 60 cm 即ち $f4.5$ になつた、其の他の條件は總て豫定通りに見事に出来上りました。

玉の出来上つたのは七月早々で、機具其の他、取附の完成したのは其の十一



狐座29番星を中心として(1932年10月1日)

日でありました、十二日夜、早速焦點試索の撮影をしましたが、其の後は曇天続きで一枚の撮影すら出来ないので只々空を仰いで歎息計りして居ました、其の月の廿四日からの晴天に恵まれて數夜に亙り〔乾板上に於ける適當なる焦點の位置を決定し得ました。乾板の中心に於ける焦點の決定は直ぐに決定しますが、乾板全體に於ける適當なる焦點位置の決定は中々骨が折れます。僅に0.2ミリ位の相違で全面の星像の結び方は大變な相違を現します、私は此時につくづく老眼の悲哀を感じました。

茲に決定した焦點で撮影した乾板上では八度平方まで實に立派な星像を得られます。中板の乾板上の短い方で約十一度収まります。上圖の寫眞の短い方には約十度収まつて居ります。八月に入つてからの天候はとても悪くて寫眞の撮れる夜は殆んど有りません。只僅に廿九日と卅日の夜だけが稍良かっただけで、九月も同様一日、十九日、廿五日の三ヶ夜だけが稍や良好であつただけで、二時間打通して寫眞撮影には適した夜はありません。十月一日の夜に初めて良夜を得て、二時間露出の寫眞を得ました。斯くして中村氏に星野寫眞を見せる機會がなかつた事を非常に悲む者であります。

寫されたる乾板上に果して何等星までの星が痕蹟として現はれて居るか未だ北極の撮影が出来て無いので明確に申し上げられませんが、計算から申し上げますと一時間と二十分の露出で最も良好な條件の元に現はれる極限の星像は15.9等である筈であります。

氏の巨軀は悲しくも、又惜しくも、再び見る事が出来ないが、氏の努力に依つて作られた最初で之れが又最後のものである此の見事なる寫眞玉の偉力は永久に天空に向つて働きかけて居ます。

故中村要氏の鏡面製作研究に就いて

木　邊　成　麿

序

中村要氏が去る9月24日突如として逝去された事は實に驚いた次第です。一時は全く疑ひましたが然しそれが事實なるを知るや私は本當に暗然と致しま

受けました。今回山本臺長の御厚意により我等二/三の者が故中村氏の後を追つて反射鏡方面を花山で研究をさせて頂く事になりましたが、智識にも、努力にも、又時間もなく、すべての條件で比すべきでない私が充分なる研究や成果を収め得るものとは思へませぬが、堅き決心を以て故中村要氏の靈に對する心持ちで折角成された仕事をせめても崩壊させぬ程度にでもと充分の努力を拂つて行ふ心積りです。

最後に故中村要氏の冥福を信じて已みません

— 完 —

滋賀縣野洲郡中里村 木邊成麿 10月31日稿

天文の奇才中村要君を偲ぶ

水 野 千 里

天文の奇才中村要君は去る昭和七年9月24日白玉樓中の人となつた。その翌朝大阪毎日新聞で知つた。見出しは「少壯天文學者京大助手〇〇す」¹とあつたが、中村君はホントに逝いたのであるか？あの中村君が〇〇しやうとは夢にも思はなかつたので、驚き方は一方ではなかつた。中村君に初對面の挨拶をかしたのは、去る大正十年頃であつた。兩三回拙宅を訪問され、ユルユル話した。倉敷や岡山で講演して貰つたことは數回である。倉敷天文臺の32糎反射望遠鏡の据付けは中村君を煩はしたのである。その後渡銀を願つたことも五度や六度ではなかつた。

大正十五年十一月二十日の大阪毎日新聞に「あす開所式をあげる まだ我が國に初ての民衆天文臺、セツセと望遠鏡をみがきながらボツボツとはなす、助手の中村さん」¹といふ長い題で次のやうに書いてあつた。

木の香眞新しい外堀に囲まれて水色の無蓋屋が浮いて見える、大原獎農園前に出來た、それは日本で最初の民衆天文臺で、あす開所式をあげることになつてゐる——入つて行くと臺だけ取りつけた室は、がらんとした人の氣もない、外では鉦の音が小春日和の青空へ高く響いてゐる。獎農園の講習室に行くと、そこに薄水色の長い圓筒が横たはつて居る、取り散らかさ

れた大小種々のレンズの中に、京大山本教授の助手中村要君が白の仕事服を着てせつせとレンズを磨いてゐる「何分取りつけを急がねばなりませんからね」とニコニコしながら一寸仕事の手を休めて話し初める「マアどうぞこのレンズを見て下さい、可なり古いものと見えて手もつけられぬ程汚れてゐます、何しろ機械部分には製作年月が1892年とありますからね……レンズはカルヴァー氏の製作ですけど、機械の方はホルランドといふ機械師の拵へたものです。徹夜して観測するかとおつしやるのですか、飛んでもない、天文の研究家だつてそんな勉強家はゐやしませんよ。寒くなつたり、眠くなつたりすりや止めてしまひます、それでどんな精巧な望遠鏡を使つたつて、さう容易に星の方でレンズの中へ飛び込んで呉れやしませんよ、狭いやうに見えてもなかなか天は廣いですからなあ……まづ星座に見當をつけて、氣長に待つてゐるといふ譯ですよ、最初こゝへ来る時は直さま見られると思つて來たんですが、どうしてこの始末ぢや二三日後でなくちや觀られやしません、この頃問題の喧ましい火星ですか、いや火星だつてさう三日や四日に大した變りもありません。一般民衆に自由に観測させるかといふのですか、勿論さういふ意味で開設されたのではありますが、一寸素人には望遠鏡が扱へませんよ。無暗にいじつて壊されちや困りますしね、まあ同好會員が恵まれるといふ程度のものでせう。さうですね、この望遠鏡が運賃共に〇〇圓位——いやしかし價格はいはない方がいゝでせう、餘り安いので素人の興味を減殺しては困りますからね。」と哄笑する、そしてせつせと機械を磨きにかゝる。中村君は中學校卒業後直ちに山本博士の助手として丸五ヶ年働いてゐる青年だが、目下日本で望遠鏡の扱ひにかけては同君の右に出るものはあるまいといふことである。

中村君の面目躍如たるものがあるではないか。中村君の最も努力されたのはいふ迄もなく、反射鏡の鏡面磨きであつた。それに火星の研究——スケッチを澤山された、又小遊星の發見にも力を注いで居られたのである、この天文の奇才中村君に就いて、吾々のいはんと欲するところを遺憾なく述べたのは大阪毎日新聞記者來問恭氏の續京大展望32理學部の卷、『學塔を支へる者、助手・中村要君』である。

花山天文臺を見るの記から逸してはならぬ一青年がある、その名は中村要君、先日米國ヤークス天文臺のロス教授からロス・レンズの設計を貰つた二十八歳(昭和六年)の若者、理學部の一助手である。

彼は體格こそ相撲とりのやうに逞しいが、いがぐり頭で粗末な服裝、どう見ても田舎の青年會員としか見えない、その外觀を甚だしく裏切つて、中村君の學的名聲は博士教授連を凌ぐほどである。

中村君は京都の同志社中學に在學中から天體について異常な興味を持ち始め、その頃同志社へ講演に出て來た山本一清博士に頼み、新城博士にも面會して、京大天文學教室に置いて貰ふやうに切願した。博士等の方にして見れば、中學を出たばかりの青年を教室に置いたところで何の役に立つまいと思はれたけれども、中村君の熱誠を容れて、囑託の椅子を與へることになつた。

天文學教室における中村君は自由無干涉の中に放任されたが、彼は全く自己流で望遠鏡や、反射鏡と心中せんばかりの熱心さをもつて天體觀測に従つた。ところで天體觀測者に何より必要な視力において彼は異常に恵まれてゐるせゐもあらうが、間もなくウキンネツケ流星の觀測や、火星觀測に優秀な成績をあげて、新城山本兩博士等を驚かせるやうになつた。そこで博士等は中村君が希望するなら選科生として講義を聞かせようともいはれたが、奔放不羈な中村君は聽講の方法を取らず、全くの獨習で邦語の天文學書や、物理學書をよむ傍ら、英語を獨習し、一と通り英語をマスターした次には獨逸語の獨習に取りかかり、その方もやがて獨逸文が書けるまでに上達した。

さうした學習の精進とともに天體觀測も怠らず、種々の優れた仕事をしたが、特に大熊星座の δ 星が變光することを發見して、世界の天文學界に知られるやうになり、大正十三年以來は「火星觀測者同盟」の一員に加へられ、中村君の觀測記録は P. A. 誌上に載せられ、立派に世界の文献中に加へらるゝに至つた。

中村君は大望遠鏡や反射鏡の操縦に獨特の妙腕を持つてゐるが、それは彼が砲兵として勤務したときに、大砲を操縦したお蔭である。このごろ諸

所の天文臺で望遠鏡に大砲の油を使ふやうになつたのも 中村君の兵營みやげである。

彼は四、五年前から高等數學の獨習をも開始して、今では球面三角の複雑な計算をどんどんやつてゆくのは、山本博士や上田博士が舌を巻き、「こゝ數年の中に彼は學位を取るだらう」といつてゐる。先日の學術協會大會で山本博士の發表した「微光流星の研究」も大部分は中村君の材料によつたものであるとは山本博士の明言するところである。

中村君の經歷はかのバーナード教授——小學校以外の學歷なくして世界第一流の天文學者となつた教授——を想起させるものであるが、とにかく中村君が獨習一點張りでそこまでの學殖を蓄へたのは、彼の天才的な頭腦にもよるだらうが、一面には現在の教育制度の「型」にはまつた「コース」から全然解放されて自由闊達に勉強したためであらう。今日の如き中村君の存在は、教育の根本方針に對する大きな暗示を與へるものではあるまいか？

數年前から彼は觀測用反射鏡面の製作を思ひ立ち、自分の考案で作らせた研磨機を操つて見事な拋物線鏡をいくつも作り上げた。その一つは昭和四年に山本博士等がスマトラ島で皆既日食の觀測を行つた際に使用されて、外國の學者隊から美望されたほどの好成績を納めた。

さらに彼は望遠鏡用のレンズ製作に向ひ、苦心の結果、最近では極めて優秀なレンズを作り出すに至り、その手腕が國境外にまで聞えてゐたため、レンズの世界的權威ロス教授と設計の交換をなすことも出来たのである。

さうなると、とかく商賣氣を出してレンズを賣つたりしがちなものであるが、中村君は決してそんな邪道に踏み込まない。「彼は今でも初期時代と同じ純情と向學心を持つてゐる點が偉い」とは山本博士等の評である。

展望子が、さる日曜日の晩に花山天文臺を訪れたときにも、中村君は望遠鏡を操つて觀測に夢中だつた。獨身の彼は天文臺の一室に寝おきしてゐる。研學に疲れると附近の森林地帯を歩き廻つて、きのこでも採つて來るといふ調子だ。花山天文臺上に無くてはかなはぬ人、いな京大の誇りともいふべき中村君は、現に理學部助手としてどれだけの報酬を得てゐるかといへば判任六級の月給七拾五圓也である。

中村君に限らず、たとへば理學部地質鑛物教室の助手黒田徳米君、化學教室の助手倉田正郎君、あるひは文學部で濱田博士の教室にゐる助手島田貞彦君といったやうな人々が、立派な學識を持ちながら、教授や助教授の下積みに甘んじて學塔を支へつゝあることを忘れてはなるまい。

これを通讀すると、天文學界以外の人から中村君が如何に重んぜられて居たかを知るに足るであらう。

中村君に最後に會つたのは、昭和六年六月十一日に、神戸市改發氏方で評議員會が催されたときである。開會前に「天體寫眞術」の校正をするからペンを借り度いといはれたので、私は赤ペンを貸してあげた。その赤ペンは私の日々愛用して居るものであるが、今や中村君は亡し、天文の奇才中村君は今や何處の宇宙に……魂は遠く何れにあるか 噫！

(昭和七年十月二十七日夜)

中村さんを惜む

倉敷天文臺名譽臺長 原 澄 治

中村さん御他界の報道は近頃最も私を驚かした出來事の一つであつた。あの頑丈な偉大な體軀の持主で、極めてノン氣な、天真そのまゝのやうに思はれたあの人に、こんなことのあらうとはどうして思はれやう。

私が中村さんを知つたのは、倉敷天文臺に望遠鏡据付のために來て下さつた時が始めであつた。私の宅にお泊りになつたので、私の子供等は大きな中村さんを、丁度自分のお友達のやうにして、極めて深い親しみを持つて居た。

近頃は餘程長らくお越しがなかつたけれども、中村さんと云ふ呼び聲は私の家族のものの一種の親しみを以て呼ぶ聲となつて居つたのであつた。大きな丸頭の中村さん！近い内に又親しくお目にかかることと豫想して居つた中村さんは遂に遠く天界に去つてしまつたと思へば、何だか限りなき寂しさを感じずには居られない。家族のものも皆均しく、普通以上に残念がつてゐる。是れ、君の技術智識以外に、君特有の人徳の然らしむる處であると思ふ。

學者は今後も君以上の人が澤山出來るであらうけれども、あの丸丸とした

人徳を備へた天真爛漫な中村さんは再び出来ぬであらう。謹んで哀悼の意を表します。

自力の典型者中村さん

三　　澤　　勝　　衛

一口に自力とか他力とかいつたところで、勿論絶対に自力だけの人もなければ、又他力だけの人もない。然し、自力傾向の強い人と他力傾向の強い人とある事は否定出来ない。

そして中村さんは、私に残された印象の範囲に於ては、その自力派の然かも極めて濃厚な典型的なお一人であつた。

私が中村さんを初めてお知りしたのは相當に古い。恐らくは中村さんが天文學界へ踏込まれたそもその當時であつたかも知れない。當時＝多分大正8, 9年の頃か＝吾が信州に於ける天文學の智識の普及の程度は極めて低く、全くお話にならない程であつた。たまたま其頃であつた、山本先生が其天文學的智識の普及の爲めに、例の10センチの望遠鏡をわざわざ京都からお持ちになり、我が信州の南北各地に亘つて十數日間講師として御苦勞いただいた事があつた。私が初めて山本先生にお目にかゝつたのも丁度其時であつたと記憶して居る。然かも其山本先生は周知の如く決して其お身柄の大きな方ではない、却つて小柄のお方と申上げるのが妥當かも知れない。然るにその小柄の講師に對して、然かも其の助手として、是は又極めて大柄なお方がお一所に御苦勞下され、望遠鏡の操作を初め色々の御世話を見ていただいて居つた事は當時一種の奇觀でもあつた。失禮かは存じないが、たしかに其時聴講者の一人として其の御世話になつた私には左様に感じられた。尤も其はあへて私一人の偏見ではなく其時の多くの聴講者中にも、左様な感をいだかれた方が尠なくなかつたものと見え、時の地方新聞の或ものは先生と其助手の方との御一所の寫眞まで掲げられ、そして其の記事の中にその私の感じと似た様な事さへ載せられてあつた事も今尙記憶に残つて居る。然かも其大柄な助手の方がそれにもかゝらず、其言語からその御動作までが如何にも一見誠に

すなほな黙々として且つ寡言なお方であつた事も明に記憶して居る、其のお方が云ふ迄もなく中村さんであつたのである。

中村さんに對する私の第一印象は左様なお方であつたと云ふ事である。其後私は一時、柄にもなく天文に熱中＝と申してはやゝ大袈裟ではあるが＝した事があつた。只今續けて居る太陽觀測も勿論それは其當時の餘韻である。そんな事から時折京都へ出ては皆様の御世話になつた事もあつた。其時中村さんから夜遅くまで色々の星を見せていただいた事もあり、時には夏の炎天下に偶々彼のスコフィールド氏の分光器かをお使ひになつて居つた時の事で、太陽のプロミネンスがよく見えると云つてわざわざ私の下宿へ迄迎ひに来ていただいて、特に私の爲めに觀せていただいた事もあつた。當時中村さんは一生懸命に反射鏡の研究をされて居つたかの様に記憶して居るが、從つてお話もよくそれへも觸れた様に記憶して居る。ところが其の星や太陽の觀測の御指導にしても、乃至は望遠鏡の御話にしても、如何にもそれ等の御話が實際的であつた事と今尙誠によくはつきりと記憶して居る。如何にも實際的のお方であると云ふ深い印象をきざみつけられたものであらう。後年「望遠鏡の作り方」と云ふ本をお出しになつた。私は不幸にして其後別な方面へ逸れて仕舞つたから今に遂拜讀する機會を得ないで居るが、實に要領がよく然も痒い處へ手の届く様に書かれてあると云ふ事をよく聞く。全くそれは單なる翻譯ものとは違つて、著者の永い間の血の出る様な體驗から然かも自力によつて一步一步築き上げられた結果に基いて筆をとられた爲である事は云ふ迄もない。

其後、天文寫眞の方面にも非常に御造詣を深められたと云ふ事もお聞きして居るが、一體、天文學の様に、其經驗的事實に立脚しなくてはならない科學の研究に對し、先づ其現實の捕獲に對して、其最も有力な武器である望遠鏡及び寫眞術から着手されたと云ふ事は何よりも中村さんの實際的であり且つ根本的である事を證するものであらう。

一方又是も周知の如く、中村さんは火星を初め各種の遊星や、そして流星の觀測等に就いても極めて澤山の成果を收められて居る。

とかく、何か天文學の研究とでも云ふと、最初から恐ろしくむづかしい數學の公式でも振廻さなければならぬかの様に思つて居る人々の數なくない

今日、勿論、凡ての科學がやがては其數學の力をかりて整理されて行くべきものではあらうが、何としても其精密な經驗的事實を無視するわけには行かない。然るに先づその精密な觀測に、そして又大望遠鏡の力を借りなくては到底充分の觀測の出来ない彼の球狀星圖だの螺旋星雲だのに其の宇宙の眞理の含まれて居る事もであるが、然し左様かと云つて、極めて卑近の様に考へられて居る遊星や流星現象にも同じく宇宙の眞理は輝いて居る筈であるが、その觀測にいそまれた事は明に慧眼である。そしてそれは彼の犯罪科學に於てその人相よりも却つて微細な手紋等の方面にその有力な手がかりがあると云はれて居る點から見ても明確な事でもあらう。

私は中村さんの研究が其の雜誌や著書に發表される都度、他人事ではなく、等しく科學特に經驗科學の方面に多少の關係を持つ自分として、常に其實際から離れてはならない事を戒めて來て居つた。一般的な觀方ではあるが今日農村の不況も都市の不振も、要する處は其生活が餘りに其實際から離れて居るからの事ではなからうか。

然かも中村さんの其實際の研究に就いて特に注意しなくてはならない事は、如何にもそこに其自力的色彩の濃厚な點を過分に持つて居る事である。從つてそこには人一倍の苦勞のこもつて居る事も云ふ迄もない。丁度吾々が彼の幼少な時代に於て先づ歩んでは倒れ、倒れて歩み、そして漸く一人前の歩行の出来る様になつた其れにも似て居る。歩行の理論を研究してそれから歩行の術を習つたものは恐らくはあるまい。然しお互に其の當時の苦勞は今に既に忘れては居るが、考へて見てもそのなみ大抵の努力でなかつた事はわかるであらう。この中村さんの過去十數年間にとられた苦勞と、そしてそれを世間の一體どれだけの方が認められたであらうか、私はそれを疑ふ第一人者である。或は同じ大學の同じ教室に勤めてお出でになる先生や同僚の方々を中心として誠に僅かの範圍の人たちだけではなかつたではなからうか。

自力更生と云ふ様な言葉、(特に私は言葉と云ふ、)其の言葉がさながら一つの流行語であるかの様に余りも一般に然かも無造作に用いられて居る。然し其の自力の尊い點を眞にそれを理解し且つ認識し、更にそれを明瞭にして居る人がその中に幾人ある事であらうか、常に社會には所謂學閥あり黨閥あり

其常識的なると無意識的なるとはさて置き、結果はそれが横行して居る事は事實である。或はそれが見様によつては眞の自力者を養成する方法かも知らないが「人生意氣に感ず」とも云ひ又「男は己を知る人の爲めに命を惜まず」とも云はれて居る。吾等は其自力を強調する前に先づ其の自力者を認めてやる事を忘れてはならないであらう。

然るに其の自力者としての典型者である其の中村さんは今は既にこゝには居られない。吾等は社會と共に深く其罪を悔い且つそれを謝さなくてはならない。

其肉體的巨人であつた中村さんは其學究に於ても亦確に巨人であつた、其の巨人が其の自力更生の強調されつゝある然かも其の年の秋の訪れに先だつて逝かれた事は誠に淋しみ極みの一つである。嗚呼

中村要氏と凹面鏡の製作

中村要氏の訃に接し深く哀悼の意を表す

我國で反射望遠鏡の智識と實用が普及したのは中村氏の努力による點が多い。同氏の研究の初はエリソンの著に基く由ですが、天界に發表された「反射望遠鏡の智識」なる一文はエリソンを精讀し周到なる實驗を重ね、技の熟達を得て後之を祖述し且つ他の材料を豊富に加へられたるものと思ふ。決して單なる譯文ではない。鏡の製作に付ては最良の文献である。但し機械研磨に就ては殆ど書いてないが、それは素人には必要のない事である。著名なエリソンの“The Amateur's Telescope”は簡明に過ぎ、圖も足らぬので素人用でありながら難解の點がある。中村氏の文献の方がより完全である。

其製品は整形上氏御自身には或不滿な點もあつた様ですが實用上甚だ高級の程度に達してをる。之れは數個實驗して感服してをる次第であります。批評致す事は甚をこがましき儀なるも、下記の様な徑路をとつてをる私は氏に就て最よく理會し得る者の一人と思ひます。

私は京大機械科明治卅九年出の老技術者であります。卅四五年前中學時代に老眼レンズと虫めがねで自作した長さ五尺の望遠鏡で木星の圓板像や月をながめてよろこんでをりました。高等學校在學中、物理の教授に或中學校の先

生の設計で島津製作所が土星の輪の見へるものを作つた話を聞いて、ほしがつた事があります。素人用天體望遠鏡のたやすく手に入る今日にくらべて隔世の感があります。卒業後繁忙な仕事に追はれて此方面は全々絶縁でした。十年前、ふと凹面鏡を作つて見たいと思ひましたが適當なる材料が集らず、そのまゝになつてをりました際、たしか八年前と思ひます、同好會の總會が岡山で開かれ、山本先生に同伴された中村氏が鏡製作の講演をされました。時間の都合であまりに簡單すぎましたが、或ヒントを得ましたので、早速六時の研磨にかゝり、三枚目にかなりの作品を得、マヌウチング全部手製で完成しました。中村氏が流星觀測のため來岡された時に星像検査をやつてもらいましたら傷は多いが拋物線に甚近く出來てをるとの事でした。大震災後本職に大變動を來たし閑散の身となつたので現在では之に没頭し既に二百枚以上研磨しました。目下の研究は機械のみによる整形であります。研磨機は自分の考案で三臺を一つのテーブルに据へ、獨立に一臺づゝ運轉し得るのみならず、各個の組合はせにより、在來知られたる諸種の研磨機の運動は殆んて發生し得る機構です。

さて氏亡き後の反射望遠鏡界はどうなるか？

エリソン氏曰く

“反射望遠鏡の能力は決して屈折に劣らず、その聲價ををとするものは反射式其物に非ずして只鏡製作者の無責任による”と

今後私は鏡を自作さるゝ諸氏のために御相談相手となつて及ばず乍ら出来るだけの御手傳をしたいと思ひます。工程上最重要でしかも最困難なるはピッチの調合です。それは各工場の嚴秘とするもので素人諸氏の手に入る望は先づあるまいから其時期の温度に適するものを調合して分譲致します。

岡山市古京町一　坂本鑒四郎

哀悼黃道光課顧問中村要先生

黃道光課長（倉敷）　荒木健兒

我等の黃道光課顧問中村要先生は、去る九月24日突如として死去された。25日の大阪の新聞の報道によつ驚かされた私は、今やいふべき言葉を知らな

い。しづかに近い過去をかへりみると、むやみと涙をさそふものがある。實に最大の悲しさである。

天文同好會にかなり早くから關係してゐる私が、中村氏にはじめて會つたのは去年四月花山を訪れた時である。その時、氏はクロノメーターの修理で大へん忙しくて居られたが、ガラスの研磨や小遊星の檢出などを自ら説明された。

花山で前後三度と、今年六月11日夜の神戸支部の例會と、先頃の石山の黃道光會議と、都合五度會つてゐる。

實に親切であつた。天界に出される論文めいたものを見てゐると、全く學者然たる人で、近づくにくいと思はれる點がないでもないが、會つてみると決してそんなことはない。勿論どこまでも科學を愛する人であることには一點のあやまりもないが、あのニコニコの溫顔を接して何ともいへない親しさを感じたものである。

はじめの頃、私は「中村君」とよんで、全く友人扱ひにしてゐた。本人に向つても二度や三度は「中村君！」とよんだことがあると思ふ。その後、段々氏の人格がわかってくるにつれて、とうとう一躍「中村先生」にしてしまつた。「先生！」とよびかけても何ともなくなつた。別に親しみが少なくなるといふことは勿論なかつた。

天文學一般の問題について、殊に黃道光の觀測上について、どれ程御教を受けてゐるかは、考へれば考へる程深いものがあり、指折り數へることさへ出來ない。先生の一言一言そのものがすべて教であつた。而も、先生は教へてやらうと思つていはれたものでないことはしばしばであつた。とにかく表面的のみでなく、あくまで内容があり、自ら苦心の上體得されたこととて、實のあることのみであつた。

注意深い人であつたから、決してはなげなしい人ではなかつた。小遊星や彗星といふむしろ地味な仕事に向はれたのも先生の眞面目さが伺はれるであらう。

全國的に多くの弟子を持つて居られた。望遠鏡について先生の御世話になつた人は随分多いであらう。倉敷天文臺にも小さい屈折鏡を先生の御手を経

て求めてゐる。かうすると全く安心して使へるのである。経験によつて得られた權威といふものはありがたいものである。私達は何か一つのことでもマスターしたいものである。

二度目に花山へ行つた時、先生から、「黃道光に関する論文がこれこれの雑誌に出てゐるから見ておいてくれ」といはれた。その一つが全文を譯出しやうと考へてゐるスペクトルの問題である。

石山の黃道光會議に出席した諸君は、先生の天體觀測上の深い経験におどろかれたことと思ふ。あの時の決議事項を御らん下さい。中村先生の偉大さを物語る空氣がみちあふれてゐる。ちよつと宙をにらんでいらしたかと思ふと、大切な議題をサツと出されるところ、あの會議がもつと長時間つづいたらどんなであらかとおもはせた。山田君にであつたか、「同じ目的のために働いてゐる人が集ることは面白い」といつたが、黃道光會議の成功は中村先生に負ふところが多い。

先生は休日にも仕事をせられた。天體觀測や鏡面研磨そのものが先生につては大きい慰安であつたのである。あの紅柄によごれた仕事服をつけた時こそ、先生の得意の一場面であつた。

とにかく偉い人であつた。今やいちじるしい發展の段階に上つた我等の黃道光課を導いて下さる一人を失つたこの悲報！誠に残念の至りである。

(1932年9月28日發行黃道光課通信第16號より)

中村さんの思出

T. O. 生

中學四年の頃だつたから大正十四年の春だらう。修學旅行で天津から疏水で京都へ出た夜である。水野、宮原兩先生の紹介狀をポケットに、乗る電車を一々きいては京大へ馳つけた。そして恐る恐るあの古めかしい平屋の教室へ入つて行つた。迎へて下さつたのは餘人にあらず、背の高い中村さんその人であつた。

水野先生からの御手紙で御承知だつたとかで、早速あの九尺二間式の室に通された。勿論初対面の言葉なんかは何處かへフツ飛んで、兩恩師の二枚の紹介状は僕のポケットの中で到々立往生してしまつた。

中村さんの前にはオットエ！かなにかの三時望遠鏡があつたと思ふ、アイ・ビスの掃除中らしかつたが、先づ氣がついたのは中村さんの兩手の指が全部眞黒だつたことである。

僕は自分の小學生時代を思ひ出した。習字が嫌になつて筆で爪にいたづらをしてゐた頃を。

「中村さんもキツトそれだ」と當時の僕は思ひ込んでしまつたので、心中甚だ可笑しく、中村さんの爪ばかりを眺めて居た。中村さんもそれに氣づいたらしい。

「反射鏡のメツキをやると爪がこんなに眞黒になつて困りますよ」
との話だつた。

それから十八センチのドームに案内されたが、あいにく殆ど全天が曇つて居たので、それで星を見る事は出来なかつたが、始めて見る望遠鏡の姿に驚かされてしまつた。リング・マイクロメータの自慢話と、望遠鏡の筒の中の蜘蛛の巣についてコボシテゐられたのを思ひ出す。

そろそろ空が晴れて來たので、夜露に濡れた草を踏んで十センチに行き、土星のリングと衛星チタンに驚かされた後、子午儀室へ案内された。こゝでは幾らでも出て來るテーブルに驚いたものだ。

そしてやつと最後の電車をつかまへて東本願寺前の宿へたどりついた時はクラス一同夢圓らかの有様だつた。

僕と中村さんの關係はこの日から始つたわけだが、印象はこの様に深く刻みつけられてゐる。

始めて三十センチの屈折鏡を案内して貰つたのも中村さんだつた。プロミونسを見せよう額とから汗を流しながら分光器を調節して居られた君の顔がマザマザと眼前に浮ぶ。

然しなんと言つても中村さんと共に直ちに思出すのは反射鏡である。幾度も天文臺を訪問したが、案内者は常に中村さん、そして話は必ず反射鏡だつ

た。

地下室の小さな研磨臺から、モーター付きの自動研磨器を動かして見せて下さつた中村さんは得意らしくつた。

地下室時代だつたらうが、研磨臺の横の机に二三冊の婦人雑誌がのつて居た事があつた。冗談半分に婦人雑誌と反射鏡の関係をきくと

「磨いてゐる時、あまり暇だから読むのです」

との答だつた。誰でも反射鏡を磨いた経験の人は直ちにわかるだらうが、一生懸命に磨いてさへバラボラにならないのに、雑誌を読みながらとは、と、かなり驚かされた。爪は依然として黒かつたが。

反射鏡の話は實に微に入り細を穿つて居た。暗室に連れ込んでフーコー試験を見せたり、平面鏡を二枚合せて、ナトリウムのD線で干涉縞を出しておき、少し温めるとその縞が亂れて行くのを見せて貰つたこともある。

三十センチの屈折鏡と自作の十五センチ反射鏡とを、月面の同じ部分に向けておいて、像の鋭さを比較、自慢されたこともあつた。

野砲兵で、六尺豊かの大男の中村さんには、優しい親切な半面と、光の波長的な細心さがあつた。そして不斷の笑顔とが。

幾度か花山を訪れようと決心しながら、生來のツボラから今迄果さなかつた僕は遂に花山における中村さんの活躍振りを親しく見ることは出来なかつたが、仙臺への往復の途中、汽車が山科にさしかかると常にあの銀色のドームを車窓から眺めながら、あの大きな體の上の微笑を想つた。

中村さんの死を教室で友人から聞かされた時はひたすらに新聞の誤報を祈つた。

そして今日まで全く半信半疑で過して來たが、今朝到着した「天界」は君の死を冷たく報じてゐた。

ひたすらに星を愛し、大空の美に憧れた君は何故に幸福たるべきその餘生を自ら縮めたのだらう。

あの鐵の様な身體と意志と熱情、そして絶えざる微笑、僕の知れる範圍における君の「アトモスフェア」は斷乎として現實を否定せんとする、而も嚴として動かないのは冷い死の影である。

ボルツマンが自らの手でその生を斷つた時、ある學者は云つた

「彼が行くところ常につきまとつたのは“不幸”だつた」と。

この言葉が中村さんの生涯にも適用出来るか否かは、深く中村さんの私生活を知らない僕には、何等批判の價值はないが、外見上の中村さんは常に幸福さうに見えてゐた。

冷い數學と、高遠な力學で固くとざされてゐた天文學の扉を次から次へと熱情でおし開いて行つた人、英のハ―シエル、米のバーナード、恐らく後二十年の生命を與へたならば、彼等にも劣らないアルバイトを残し得たであらう惜しい人は去つた。

中村さんの學術上の業績を我等素人が批判するのは潜越である。然し山本先生等と共に天文學の大衆化に努力した君の功績も永久に記念さるべきだらう。

灰色な、陰鬱な、そして因襲的な現在の學界に對し、自ら反射鏡を製作しては大衆に天界の美をわかち、筆をとつては天體の觀測法を、亦寫眞撮影法を、反射鏡の製作法を普及せんとした君の努力は偉大だつた。

短かつたが花々しい努力の生涯を送つて去つた君の靈よ、希くは永遠に若き學徒達の辰星ならんことを！

10月28日　仙臺にて

中村先生の思ひ出

金　森　丁　壽

去九月二十三日より當地で山本先生を聘して天文學の講習會が開催されました。ところが二十四日の午後四時頃突然一大事件が突發してしまひました。それは中村先生の急死を報ずる電報が配達された事です。私は只、驚愕してゐるばかりで、何をどうどうしてよいやらさっぱりわかりませんでした。

先生を篠ノ井驛まで御見送りいたしました時はもう眞夜中近くでした。冷い秋の夜風がつけなく自動車の窓からふき込みます。先生はかなしみのあまり多く口をひらかれません。私はしづかに従ひました。

汽車はこの一大不幸の起つた事も知らぬ如くにしづかに發車します。先生

の御姿は次第次第に闇の中にきてゆきます。私はたゞぼんやりと石像の如くブラッドホームにつつ立つていました。中村先生はたしかになくたつてしまはれたであらうか？どう考へて見ても本當とは思はれない。けれども先生がお歸りになつたところをみるとたしかになくたつてしまつたのだと思ひました。

今年の二月末、修學旅行の途上、生徒と共に花山天文臺を訪れました。生徒達は大望遠鏡をみせられ、レンズは如何にしてつくるかといふ事について多大の關心を持つてゐました。幸ひ中村先生より本館地下の研究室においてレンズ磨きの大要を教へていただきました。生徒は皆よろこびと驚異の眼をみはるのみでした。地下室がせまいので十人位づゝ一團となつておりてゆきました。先生は非常に熱心に、而も詳細に説明して下さいました。生徒もつり込まれて我を忘れてモーターの運轉するのや、ガラス板の廻轉するのに見入つております。時計を見るともう花山を出發すべき時刻は三十分もすぎてゐます。私は大變失禮であると思ひましたが、ドアのところで、

「先生どうぞ簡単に御願ひ致します」

とおそろおそろ願ひ致しました。先生はいつものやさしい眼つきでこちらを一寸見られて、

「はい」

と答へられました。私はその時の様子が今までのあたりへ浮んで來ます。はじめてレンズ磨きの方法を知つた生徒たちのよろこびは大變なものでした。花山を下りつゝ中村先生の親切な事や、體の大きい事等、それからそれと話しては笑ひました。生徒たちは今度の講習會で山本先生が御來校になられるといふので、大變よろこんでゐましたが、今度は中村先生のなくなられた事をきいて大變悲しみました。どうしてもそんな事はうそだと言ひはるのです。たつた十數分生徒はお會ひしたのみですが、中村先生の印象は非常に深かつたのです。何か關西旅行の思ひ出話が出ると、いつもきまつた様に花山の話、それにつれて山本先生と中村先生のお話が持ち上りました。

昭和五年八月末、私は中村先生にははじめてお目にかゝりましたが「親みやすい人」といふ印象をつくづくと植えつけられました。本館のバルコニーに

立つて御郷里の物語りなどをよく一生懸命でなさいました。

「大きな望遠鏡を持つ様になると皆なかなか観測してくれない。」

等とも話されましたが、私はこの御言葉が、なに故か一番印象が深いのです。

今日、今までにいただきました御手紙を皆くり返してよんでみました。

「小生が種々な事をやるのも將來一生使へる器械が出来るまでの練習で、どれも器械力の點で少し進めば行つまります。天文臺が新しいので何をするか方針も不定であり殊に日本人のわるいくせで何でもやつて見たがるので色々な點で迷ひます。」(昭和三年十一月二日)

と申されました。六年一月十日の御手紙には次の様な事もありました。

「○○氏は天體寫眞がすぎなのであまり記録される様な観測はやらない人ですから變光星の観測などはいくらすすめても手をつけ様と致しません。但し熱心さは大したものですから近いうちに花山天文臺より内容の良い天文臺が關西のどこかに出来るでせう。小生がその設備について相談相手になつて居ります」

とあり、そしてエロスについて興味ある御手紙をいただいております。

「エロスも數日前から視差の測微観測を始めました。夕十時半と夜明け方丁度エロスの高度が 30° の所とで測るのです。一回の観測時間は15分前後ですが床から起るだけが一苦勞です。エロスは今ではすぐさがせますが、クモ糸をエロスらしいものゝ上において一分すればエロスかどうか動き方で解ります。近々特別な目的でエロスの光度観測と高倍率観測を始めますつもりです。これは最近に氣づいた事ですが、エロスが一寸長いのではないか、其の橢圓率と方向の観測に手をつけてゐます。それからエロスの變光は範圍がへるのではないかと思います。— 10° 位になつたら或は變光が極めて小さくなりますかどうか？肉眼の観測では連続してやると前の観測が頭にあるので観測誤差の1.5倍の所までは光度曲線が滑かになる方向に観測がひつぱられ勝ちです。寫眞はこの點割合に何度もくり返して測れるだけに正確ですが撮影に暇をとります。」

六年二月二十六日にはこんな御手紙をいただきました。

「先日二十日頃の手紙に書いたエロスは私の推定が當つたのです、エロスが

長く見えたのも本當だつたのです。≡ 何れ廻りか、望遠鏡が小さいので分りません、週期は2時40分の二倍となるわけです。こんな形でせう。○簡単に長くない様です」

先生から送つていたゞきました 變光星觀測用の寫眞星圖二十六枚が今は唯一の片見となつてしまひました。

未知の先生

岡山縣玉島 安原久美子

……まあ中村さんがおなくなりになりました由、驚き入りました。誠に惜しい事でございますね、花山きつての勤勉家であり、且レンズのみがきのお手なれでありましたと承つてゐます。前途有望な方を失はれました事、返す返すも惜しい事でございます。

人命はまことにはかかないもの、まだ三十にみたないお年若とか。私はもう四十位の方とのみ思うてゐました。世の中にはいらぬ命をもてあまして苦しんでゐる人もありますのに、若い有爲な人を召すとはあまにうらめしいではありませんか。

星空を仰いで淡い流星がありますと、すぐ先生を追憶します。お目にかかつた人でもないのにどうしたんでせう。自分でも不思議です。いかに惜んだとてせんすべもありません。遙に御めい福をおいのり申し上げます。〔手紙の中から抄——荒木健兒〕

中村さんを憶ふ

古 畑 正 秋

何と言ふ運命の仕業であらうか！何人も夢想だにもし得なかつた事が既に嚴然たる事實として時の掌中に固く隠されてしまつてゐて、人間の力で最早如何ともする術がない。『あの中村さんを如何なる天の意を以てしも此世から去らしめる事が出来るものか。未來の大きい約束と、凡ゆる天文關係者の期待とを裏切る事が、如何に神なればとて出来るものか！』中村さん急死の電報

を手にして私はさう否定し、憤激せざるを得なかつた。然し此の固い確信も現實に破られたのであつてみると、驚愕と、悲歎と、残念さとが交錯して肺腑を突かれる思ひである。天才は薄命である、餘りにも惜むべき此のさだめが、終に氏をとらへてしまつたのである。天才が其の天分を發揮し盡した時、其の生命を奪ふのが天神の掟であるのかもしれない。思へば氏の今迄の業績は天才人としての偉才を充分に發揮し盡してゐる。然し然し我々は氏に更に超天才人としての生涯を今後に於て期待してゐたのである。非凡な才能と技倆とを將來に於て更に更に展いて貰ひたかつたのである。今更取返しのない事とは知り乍ら、どうしても諦め切れぬ所以である。何とか出来なかつたものかとの未練をどうしても捨てる事が出来ないのである。

氏の學問上の天才的優秀さは今更喋々する迄もないが、私としては、科學者としての氏よりも、人としての氏の追憶を忘れ去る事が出来ない。勿論氏に接した時日も長年月に涉つたのではない故、或は氏の全貌を盡くし得なかつたかもしれないが、私の心に映じた儘を少し記してみたいと思ふ。

一度でも氏に接した人は誰しもあの六尺の體軀に相應しい大海の如き圓滿且溫和な人格の持主であつた事を知られてゐると思ふ。文字通り溫かみのある人、親しみのある人で氏はあつたのである。私が始めて氏に會つたのは確か中學五年生の十二月であつた。諏訪の三澤先生宅へ來られて、現在自分が使用してゐる八糎赤道儀を世話された時であつた。五尺に足りなかつた其頃の私は氏と並んで歩くと丁度肩位迄しかなく、大股でどんどん歩かれる氏の後を走る様にして隨いて行き乍ら、あの溫良な第一印象を焼付けられてしまつた。其後度々花山天文臺に滞在する様になつて朝晩親しく氏に接し、一方ならぬ御厄介になるに及び、益々此の印象を強められていつた。

丁度花山に小犬が生れた時である、朝起きるから夜寝迄、あの大きな全身を子供の如く喜びに満たせて、「ちび」、「ちび」と可愛がられた姿を忘れる事が出来ない。昨年の夏も私と共に毎日缺かさず稚兒ヶ池へ泳ぎに出掛けたが、其時も必ず「ちび」をつれて行つては、一緒に泳がせるのであつた。自分が泳ぐ事より「ちび」を泳がせる事により多く喜びを感じて居られる様であつた。又花山の南の構内に時々顔を出す小兎の舉動に一生懸命になる様な童心

の持主でもあつた。此の兎の事については、今年天界六月號の觀測帖に迄書かれてあるが、之を見た時私は思はず氏の童心、聖心に微笑されてしまった。此の一事を以てしても其の性格の一端を覗ひ得ると思ふ。實に稀な人格者である、而かも世間によくある、「沈黙、石の如き」型の人格者に非ずして、明るく温かき人格者であつた。それだけに誰でも心から親しめる人であつた。一般に天才的の人は幾分變人めいた所があるものであるが、中村さんだけには、さうした所を微塵も見られない。時として意見の衝突を起し易い、一本氣なものであり勝ちな學者間にあつて、全然人に惡印象を與へる様な事がなく、どちらへ向いても圓くをさめる事の出来る稀な性格の持主であつた。と言つて長上の人に故意の遠慮をするとか、詔ふと言ふ様な事は全然ない。而かも我々年少の者や氏を崇敬する一般素人に對してはどこまでも親切であつた。一昨年十一月末であつたか、私が花山を去る時、重い旅行鞆を、勧められる儘に棒に通して、前を中村さんに擔いで戴いて、小さい私が後ろになつて、山科への近道を馳け降つた事があつた。丁度氏も自宅へ歸られる時であつたが、其時の親切さは未だに忘れる事が出来ない。中村さんに直接接しられた人、望遠鏡について世話を受けられた方は、皆恐らく此の事を感じてゐるであらうと思ふ。

偲べば偲ぶ程、天稟と人格とに満ちた存在であつた。如何で之を惜しまざるを得べきか。如何で之を悲しまざるを得べきか。

今回氏の記念號發刊の由を聞き歡喜にたへず、氏の追憶を更に新たにする意味に於て、氏の生前を偲び、思ひ出づる儘に拙ない筆をとつた次第である。氏の靈よ瞑せよ！

中村要先生と私

大阪南支部員　北村重雄

去る9月25日、午前5時半に起床した私は折柄投入されたばかりの、大毎朝刊に目を通した瞬間、思はずあつと叫びました。「少壯天文學者、中村要氏〇〇す。」それは何と言ふ悲しいニュースだつたでせう。

其の數日前、支部長伊藤兄から先生が神経衰弱でお困りとの由を承はつたので早速お見舞狀を出して置いたのですが、既に花山に居られなかつたから、お手に入つたかどうかと思つてゐます。私は少時、茫然自失してゐましたが、やうやく我にかへつて同志に電話しましたら、一同皆驚くやら、嘆くばかりでした。事實私自身も半信半疑でしたので、不取敢御實家へお悔み狀を出し、只管哀悼の意を表し乍ら、確實なる本會よりの詳報を待ちましたが、今朝「天界」11月號に依り其の動かすべからざる事實なるを知り、今更の如く涙新たなるを覺えます。茲に先生と私との奇しき交遊を追憶して、今頃宇宙の何處かを天駘りつゝあるであらう先生の御靈に呼びかけたく思ひます。

私が初めて先生を知つたのは去る昭和4年末、私が本會に入會の時でした。まだ其の頃は入會に、會員の紹介が要つた時でしたが、一人の知人も無かつた私は、自分の愛讀してゐた「趣味の天體觀測」の著者である先生に突然葉書を出して御紹介をお願いした處、直ちに御快諾を得たのでした。

以來ずつと文通に依る御指導を仰いで來ましたが、昨年7月に入つて、止み難き望遠鏡への憧れと費用上の御相談を致しましたが、先生は貧しい私にいたく御同情下さいまして、御多忙中にも不拘、7センチ鏡をお磨き下さいました。そして9月24日私は花山を訪ふて先生に初對面し、構内を案内して頂き、歸りに7センチを擔いで喜び勇んで眞暗な花山道路を下つたのでした。降つて今年初私より當支部設置の記念集會に先生の御光來をお願いして、これも又お聞き納れ下され、去る1月7日夕、天満橋に先生を迎へ、本部へ御案内申上げ、御歸りも同車して御送りしたのでした。實にこれが先生を見る事の出來た二度目にして且つ最後だつたのです。先生の死は、先生のみを唯一の光明、先導として來た私に取つて、全く致命的の打撃でした。行途遙かなる趣味の道への精進に、私は今後如何に惱みと淋しさを持つ事でせう。世界學界の一大損失、花山の不幸は甚大です。嗚呼、先生よ。何故死んで呉れました！。諦めやうとて諦められる事でせうか。先生の遺著二冊を抱きしめ乍ら昨夜も又感慨に耽つた事でした。かくして私にとつて9月24日こそは生涯を通じて悲喜交々の忘れ得ぬ思出の日とはなりました。大津市外眞野村の墓地に淋しく眠る中村要先生よ！冥せられよ！貴下の學的名聲は燦として世

界天文學史に永遠に不滅の光輝を放つ事でせう！。

先生の冥福を祈り乍ら、生前その恩義に報ひ得ざりし悲運を先生の墓前に謝す日の近い事を誓ひます。あゝ、悲しい哉！（昭和7年10月27日）

（尙先生より頂いた都合⁹通のお便りは、觀測帳に貼り込んで永久の記念に秘藏いたします。）

中村さんの追憶

紀伊 小 槇 孝 二 郎

私がはじめて中村さんに御便りをいたゞいたのは、大正十年の十一月はじめの事であつたと記憶してゐる。何でも「獅子座流星群の同時觀測をしたいから是非やつてくれ」といふ意味のものであつた。當時私は岡山で學生生活一しかもかなり窮屈な寄宿舎で一を送つてゐたのであるが、取敢へず「出来るだけやつて見ます」といつて御返事した。越えて同月十二日の夜突然中村さんから電報で「明十三日二時から三時までやつてくれ」と通知を受けた。流星觀測は其の年の夏はじめてやつた様なことであつて、良成績はとても望まれなかつた。しかし、とも角一時間の觀測から十三個の流星を觀測した。翌日はすぐ觀測を中村さん宛に送つたが、はじめからあやぶまれてゐた様に基線が長すぎた事から、同一流星は見られなかつた旨御知らせがあつた。

この事があつてから中村さんとの間に手紙の往復が重ねられる様になり、色々御迷惑をかけたり、無理な御願ひをした様なこともあつた、しかしいつも御親切に御教示をいたゞいてゐたのである。

はじめて御會ひする事の出來たのは翌大正十一年八月であつた。中村さんは、多分水野千里先生の御招きで岡山で天文講演會か何かに來られたものと記憶してゐる。一目見て其の偉大なる體軀に驚いたが、其口から出る物やわからかな言葉に接して、云ひしれぬ親しみを感じたのである。翌年の夏には私の郷里である津山市に中村さんを迎へて、美作支部主催の天文講演を御願ひした事もある。其の時は水野先生も御出で下さつて院庄の舊蹟をおとづれた。

大正十三年の夏は中村さんの宅に参り、一夜を天文談にあかし御厄介をか

けた事もある。爾後は京都に出る度に立寄らせていただき、望遠鏡に、観測に、啓發していただいた事は實に多い。

私が紀伊の方へうつつてからも同じく交際を続けたのであるが、こゝに一つ面白い思ひ出がある。時は昭和四年の一月十三日。中村さんは和歌山高商の20cm反射赤道儀取附けの爲來和せられ、其序に私の宅まで足をのばしていただいたのである。南國の冬は實に暖かく、中村さんは度々「この寒中にこんなに暖かいとは實に想像も及ばぬ。京都であれば四月のはじめ位に相當する」といはれた。此の日朝の十時頃こられて一日をぶつ通して天文談に花をさかせたのである。正午すぎ白亜紀の化石で名高い鳥屋城山（海拔300cm）に登り山上で數時間を過したが、此上でも些の寒さを感じない程であつた。夕食は牛肉のすき焼で、二人して一升飯をペロリと平らげて家内のものを驚かした。中村さんは人も知る巨軀、二十貫以上ある方であるが、私も十八貫近く、あまり軽い方ではない。エネルギー保有にもこれ丈のものは必要かも知れぬが、よく食べたものである。

私が流星課の仕事を引き継ぐ様になつてからは、一層の激勵を受けた。時には色々皮肉らしい事まで申されたが、かみしめて見れば見る程含蓄のある言葉であつた。微光流星の元祖である氏はシブスマン彗星出現後、數人の微光流星観測者の出られた事を喜ばれると同時に、その結果を常に氣づかはれて居られた。

私が最後に御會ひしたのは、本年八月二十日である。丁度山本先生の御招きで花山に参り、来るレオニズの打合せをしたり、天文臺の圖書室で流星に関する文献をしらべたりしてゐた時であつた。御病氣とかで郷里にしばらく居られ、其の日歸山せられたので、私は地下室に御訪ねして種々御話をうかがつた。二十一日には私は金屋に歸つたので、其後の御様子は知らなかつたが御元氣で天文臺に御はたらきになつてゐるゝ事と信じてゐた。

今や其の人はない。レオニズの大出現を前にして巨星はついに影を洩したのである。私には夢としか思はれない。花山の地下室に作業せられてゐる君の姿が再び見られぬとは信じられぬ。30cmの大赤道儀を操つてゐられる君の姿に永久に逢はれぬとは信じられぬ。

然し乍ら天才中村氏の逝つた事はもう動かす事の出来ぬ現實である。日本の天文學界にはもう氏を持つ事は許されぬのだ！我々凡才の幾十幾百が幾年かゝつてもなし得ぬ事を、氏は十年の短日月で只一人で成しとげられた。私は氏の遺された偉業を讃美すると同時に、氏の歩まれた足跡をたどつて向後の天文學界に微力をつくしたいと思ふ。(1932. 11. 1.)

Japanese Eagle-Eye!

武藏野の草葉の蔭にすだく虫の聲ようやく絶え、天下の秋たけて、そろそろものゝあわれ胸にしむ時、鬼才中村氏空しの報、一入我が心を打つ。一昔偉才佐々木氏を失ひ、今又この悲報至る。天春秋に富む身に何故か祟る。故郷の K 氏より中村氏の鋭眼を開きてものせる一篇をさゝぐ

すばる星	廿一視し
君ありと	我のきゝにし
そのかみの	姿みまほし

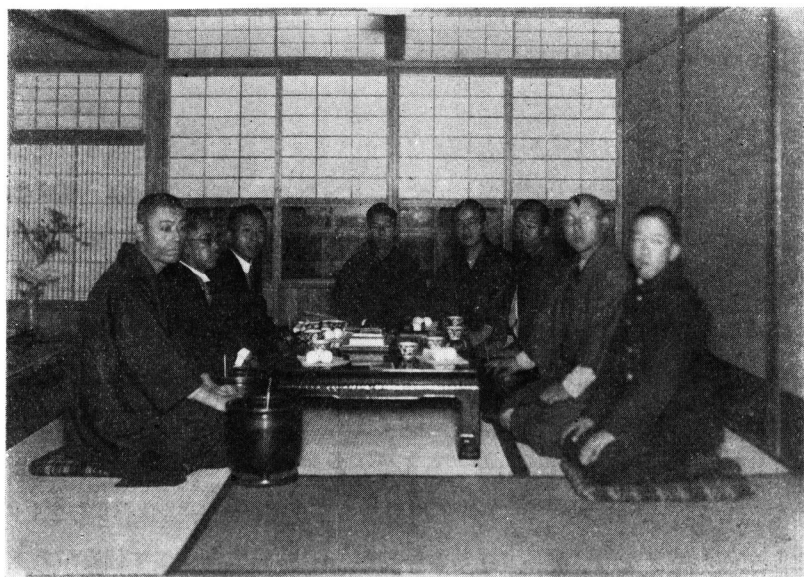
その眼	今は空しと
のそ魂よ	Comet の下
永遠の	眠り安かれ

すばる星	廿一視し
君ありと	我々語りし
人の今	如何が思はむ

Zodiacal	light の如く
流れ星	消ゆそのままに
淡き身の	姿あわれや

いさおしは	星の守人
朽ち果つも	我等たゝえん
Japanese	eagle eye と

(昭和七年十月廿八日、東都にて一友)



大阪南支部の集ひ（左から三人目が中村先生）

〔巨星地に墜つ〕

下 保 茂

黄道光課通信の第一行を見た時、先づ自分の眼を疑ひ、次の瞬間荒木兄の正氣を疑ひ、そして第二行を見て思はず口をついて出たのはこの一語でした。私の全身の血は「はつ」と頭に逆上するのです。

「巨星京師の空に墜ちて再び歸らず」今も私の頭は完全に平衡を失つてゐます。

「實に御親切な方でした」私のつまらない愚問にいつもかゞさず御返事を下さつた。反射鏡のことで二度、オットエーの對物レンズのことで一度、天體寫眞とプロミネンスの眼視觀測のことで一度、それから今春光度計のことで一度、御教へをいただいたのを記憶してゐます。

最後に八月北極の天と比較する光度計についてお書きしたのに、九月十四日大津の消印で、「御手紙受取りました。病氣靜養中につき御返事遠慮しま

す」との御葉書をいたゞいたのが先生からの最後のお便りとなつてしまつた。そしてつまらぬ質問で最後まで御心配をおかけした事を深く後悔してゐるのです。

先生と私との間は最後まで直接お目にかゝることなしに魂と魂との交渉——こう私には思へて仕方がないのです——に終つてしまいました。私はこれを反つてロマンチックな、何となくこの上もない尊いものとして、いつまでもやわらかいヴェールをかぶせて、魂の底深く秘めておきたいと思つてゐます。

今にして思ひ出すことがあるのです。何日であつたかはつきり記憶しませんが、二十日すぎであつたことはたしかです。中村先生にお見舞をさし上げ様と思つて、繪葉書に文句を書いてゐて最後の一句に、「一日も早く御全快の上星雲の彼方への御飛躍の日早からんことを祈り」つて何氣なく書いてしまつて「はつ」と氣がついて、これは馬鹿なことを書いたとびつくりしました。そして何か不吉な豫感がして、この一句が一日中氣にかゝつて仕方がありませんでした。この葉書はとうとう投函せずにしまひ、この間別に書いて差上げたのです。

はからずも先生の御魂は、星雲の彼方にお去りになつてしまつたことを知つて、今更あれは私の第六感であつたのかと魂の交渉などゝ生意氣な言葉を使つたのです。

ついでに愚作をお笑いまでにお目にかけます。

中 村 先 生 に

巨星！

天空を壓して光り輝く巨星。

花山の空に颯爽と仰ぐベツレヘムの星

宇宙、あゝ宇宙。

宇宙こそ君のものだ。

君こそ正しく宇宙の子だ。

そして、

光！

光こそ君のものだ。

君こそ まさしく光だ。

紅！ 緑！ 七つの彩り，

そのすべてを合せ容れて、
獨自な輝きを放つ白毫の光。
春の日光のあたかき心
秋の紫外線の情熱。
天かける流星！
星座の間にひそむ彗星，小遊星。
君こそまさしくその姿を見た，
そが語る宇宙の神秘をきいた。
全身，これ叡知のまなこ，
磨かれたる百時のひとみ。
圓鏡！
君こそ正しく大圓鏡。
比なき神のたくみと，
くもりなき心の鏡。
君が頭上から立のぼる銀色の光輪，
その反射は人の世に宇宙を興へた。
拋物線！
神の國に連る拋物線の軌道。
あゝ九月二十四日，
巨星，永遠に飛躍する日。
花山の碧空に，
白く輝くドーム。
これこそ君が地上に残した記念牌だ。
そして夜は天空の大ドームを仰げ，
そこに君が名をたたへた不滅の文字がある。
あゝ宇宙と共に永劫に光をはなつ，
巨星！ 中村要先生！

御逝去を悼みて

東京杉並區女子大學數學部　山下節子

9月27日，父から大阪毎日新聞が郵送されて來たので，またきつと評論か何かの面白いのが載つて居るのだらうと思ひながら，何げなく帶封を切つてみた私は，そこに大きな活字で書いてある中村さんの死の報導を見て，たゞたゞ自分の眼を疑ひ，且その事實を怪しむばかりでした。私の神戸に居たこ

ろ、毎月の例會によく出席下さつては、専門の望遠鏡の講演等をして頂いた頃の中村さんの、元氣に満ち満ちた、すぬけて脊の高い御姿が今もはつきりと思ひ浮んで参ります。また、二三年前の冬の夜に、女學校の先生の御引率で花山天文臺を訪れた時も、非常に御多忙であるにも拘らず、すべての知識に乏しく、何も勝手のわからない女學生の私共を、親切なる御指導の下に、月、木星その他を觀測させて下さつた事は、その時の私達數名の者にとつて、永く永く忘れる事の出来ないよき思ひ出なのです。

多年學界のために貢獻された中村さんの偉大なる行跡に關しては、この私の知つて居るより以上に、世の多くの皆様が御存じの事と信じます。簡單ながらこゝに謹んで哀悼の意を表します。 (11.1.1932)

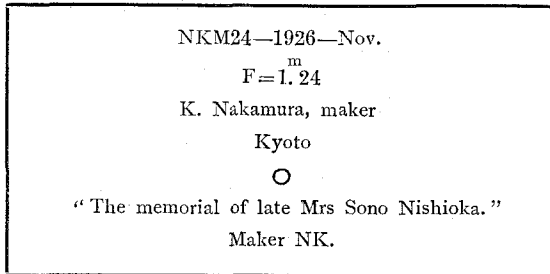
中村要君の訃を悼む

天文同好會滿洲支部幹事　西岡永太郎

科學畫報の廣告欄に、「惜まれし天才的觀測家の最後の著作」として、中村要氏著天體寫眞術あり。ハテナ中村君は逝かれたのかと、疑念に驅られた。しかし死ぬ筈はないと思つて居た。次で來た天界十一月號の第一頁には、此の訃を怪みながら、驚きながら、疑ひながら、最後に其の事實なるに憤慨しながら報じてあるのを見るの止むを得ざるに立ち到つた。更に天文月報十一月號に訃報ありて、氏は春秋當に二十九歳と記されてゐた。天若し藉すに壽を以てせば、氏は斯道に於ける世界の第一人者となるべきの腕と頭とを有せし人なりしを、嗚呼惜むべき哉。

回顧すれば七年の昔一月二十日、余は七センチの望遠鏡を携へて、乃木將軍とステツセルの名に依りて有名なりし水師營公學堂の生徒に、太陽黑點と金星とを見せしめんが爲め、同學堂を訪ひし事ありき。業を了へ歸りて見れば、コソモ如何に、朝時何の變りもなく別れにし荆妻、夕には二ツの眼堅く閉ぢ、一ツの息常なへに絶え、呼べど答へぬ姿となり果て、永久の眠に就き居たるなり。人生の果なき事我之を面の當り知れり。されど中村君があゝの年齒、あの體格、あの元氣、あの熱心さを棄て、天の彼方に昇られたとは思はざりし

なり。今亡妻を記念する爲、中村君に、十五センチ反射鏡の製作を依頼せしに、快諾の榮を得たるのみならず、氏の好意特に玻璃鏡の裏に



と彫刻して、其製作の所以を録されぬ。圖らざりき、これやがて、製作者を記念するの銘器とならんとは。純感余の如き者も亦滂沱たる流涕を禁ずる能はざるなり。

余は思ふ、中村君は、一個人私有の中村にあらずして、天下國家の至寶の公器なりしなり。否唯一邦家の至寶の公器のみに非ずして、將來全世界天文學界の至寶公器となるの人なりしなり。然るに天の無情なる、此至寶公器を、其の秀でざるに先だち、苗にして枯らせり。天下廣しと雖も、之を覓めて再び得べからず。豈其の無情を憤らざるを得んや嗚呼。

梅檀の苗にして枯るる、之を惜しむの情、豈唯余一人のみならんや。余は切望す、滿天下の偉才、世界斯道の公器となるべき素質を有する人々よ、願くは自重して公器を毀つの轍を踐むべからずと。此の悲哀の中、しかく警告を發するの止むを得ざるを痛切に感ずるものなり。

筆を擱き瞑目合掌し、曾て君が手づから撮られたるものなりとて、京大天文臺準備室に於て、親しく余に贈與せられたる、^レオリオン^一大氣狀星雲の寫眞を置き、君の靈を弔ひ奉る。六十三の老翁西岡永太郎 芳涯誌す、

中村先生

松本支部幹事 上條清人

天界十一月號を十月二十八日に見ました。卷頭の急告を見て實に驚きました。どうして逝かれたのか更に判りませんが、……………私は、先生が私の爲に

造つて下さつた九センチの反射望遠鏡があります。ほんとうに先生が造つて下さつたので、各部分毎に銘を打つてあります。今から思へば實に先生の形見であります。私が始めて先生を知つたのは大正十年頃でしょうか、縣の主催で天文講習を二ヶ所で開催しました、其の時山本先生に隨行されてホンの書生姿で來られたのが始めでした。其の後、昭和二年でしたか、當地七ヶ所で天文講習をすることになり、先生をお願いしました。私は其の後先生にお目にかかる機会がなくなりました。が、文通や反射鏡の鍍金は常にお願ひして居ました。先生の著書は何時も眞先き購入しました。嗚呼先生は今……

現し世に生きとし生けるもの、死ぬちうことを免れ得ぬ理りとは云へ、未だうら若き、且つは是れより成すあらんとする先生を、……散る花の如く、源の枝には返るまじ……嗚呼

されど先生が立てし功績の貴さは、語り繼ぎて榮となし、記し置きて鑑となし、芳しき名は嚴き磐に刻まれて花山天文臺に残されん。御靈は天に登りて星とも現れん。けれども先生の御姿は……嗚呼

中村先生の御死去には實に驚きました。私は目下健康を害して休んで居ます、随つて収入の道が切れて生活に追はれてゐます、幾分送金し度いと思ひますが目下の所困ります。

先日も其の後どうなつたか、高校生徒から何の通知もありませんでしたから失禮しました。原稿をとの御事です。漸く同封しました。字を書いてはいけない事になつてゐますからどうぞ御推察下さい

清 人

山 本 先 生

追 想

中村氏はほんとうに星を愛し、ほんとうに天文が好きだつた人です。氏の特技が Lens みがきであつた事は周知のことです。

けれども氏の Lens みがきは Lens の完成が目的ではなくて、「これによつて星を見る爲だ」と繰返して云はれた言葉に深い感銘があります。

氏は自分の仕事におそろしく自信のある人でした。

それは涙ぐましい迄に努力することによつて自己の中にいさゝかの淋しさ

をも留めぬ心強さのある自信でした

氏の作られたMirror や Lensは、私の聞いた限り、一つ一つが傑作と人々から呼ばれ、自らも『よく出来たと喜んでゐます』と廣言されるものでありました。

ほんとうに字義通りに玉を磨く人であつたのでせう。

中村氏は何と云つても大勉強家でありました。

傍から見てゐても、ぐんぐん仕事をやつてゐられることの解る人でした。

氏の場合「星との生活」が氏の生活の大部分等と云ふのでなく、そのまゝ正しく全部であつたと云ひ得ないでせうか。

黙々と、日曜の午後、地平室の工場で Lens を磨く氏の姿、夜來の雨が何時の間に晴れた曉の數時間にも白い観測眼が寫眞板の數枚をかゝえて降りて来る、そうした氏の Profile を見てゐる私には、中村氏の完結された人生が嚴肅な反省を喚び起こさせ、一人の眞面目な善き先輩を失つた悲みを彌が上にも深からせます。

氏は遠來未知の初心者にも極めて親切な溫い人でありました。

私自らがその體驗を持つ者であります。

恐らく氏が斯かる訪問者に對する氣持は「有朋自遠方來不亦樂乎」と云ふ論語劈頭の一句の感激そのものであつたのでせう。

「星を眞に愛する人」と云ふ意味が、amateur と云ふ紅毛人のことばに成語の形を得るならば、氏こそは眞に偉大な amateur であつたであらう。

或る夜、氏は自作の反射鏡を持出して私の爲めに Swan Nebula を探出して呉れました。私がぢつとこれを凝視めてゐる時『私は氣持のくしやくしやる時や、何か斯う物足らぬ時、只もう斯うして彼方此方の空を眺めるのです、すると不思議に氣持がすつとほぐれて來ます。ね、これは美事な白鳥の形でせう』と、如何にも楽しさうに囁かれるのは正しく氏の聲でした。

事務的な器械的な星の觀測に永年没頭してゐられる氏が何時迄も斯うした星の美しさを、知り出してまるで間の無い人々の味ふ様な感激を残してゐられるのに私は驚きの目を瞠り、深く打たれた事でありました。

中村氏はまことに星の光の中に人生の明るみを見出し、その光明の星の爲めに人生を苦しみ通ほされた人と云つてよからうかと思ひます。

今氏を思ひ出の世界に視る日、一片の私情を述べて氏の追憶をする次第であります。 (十一月三日 花山にて 島本一男)

中村先生の思ひ出

山 本 進

私が中村先生に初めて會つたのは、大正十四年、小學五年生の時だつたと思ふ。夏の或一日、堂々たる一人の「兵隊さん」が岡崎の宅を訪れた。愉快的な雑談の後、晝食となつて、大きな井を二杯も平げられたので喫驚したのを覚えてゐる。今から思へば、それが中村先生だつたのである。

先生が軍隊から歸られてからは、時々先生の温顔にも文にも接するようになった。そして、今年の五月から、私は花山で先生と起居を共にしたこともあつた。

先生は人も知る通り稀代の鋭眼の持主だつた。私には、ぼんやりと星雲の様にしか見えぬブレイダスを十何個とかに見分け得たと云ふ、その眼を以て花山では小遊星の測微観測や微光流星の観測等を受持つてをられた。

天文臺に於ける先生の生活は、眞に暇のない生活だつた。他の者がテニスをやつたり、ラヂオを聞いたりしてゐる時も、一人で鏡を磨いてをられた。私達がトランプに飽いて雑談に花を咲かす時も、タイムを読む先生の聲がドームに響いてゐた。

先生の生活には、私達の所謂「趣味」がなかつた。「楽しみ」といふべき物がなかつた。が、先生にとつては、研磨機の前にすはる事それ自體が趣味だつたに違ひない。ドームをまはす事が即ち先生の楽しみだつたに違ひない。極言すれば、先生の生活がそのまま先生の趣味であり、楽しみであつたのだ、と、私は思ふ。

有名な先生の眼に、變調を來し始めたのは、多分今年になつてからだつたらう。そしてその變調の度合は、春になり、夏になるに従つて次第に進んだ。それは亂視だつた。そして、何れが原因であつたかは知らないが、その頃から先生は又、不眠のために悩まされてをられた。多大の不便を忍んで、初め

て眼鏡を掛けられたが、何うも思はしくなかつた。遂に夏もなかば過ぎて、病氣療養のため歸郷せられたのである。八月二十六日、花山でホイッブル彗星を再発見した時、今更のやうに、「先生さへゐてくれれば」と思はせられた。

九月二十四日の晝過ぎだつた、私達が先生の訃報に接したのは。その時の私達の驚愕！ 取敢へず弔電を打つたものの、翌日の新聞を見る迄は、私達は悲歎に暮れながらも、誤報の二字に一縷の光明をかけて夜を明かした程だつた。

それから一週間ばかりといふものは、宿舍の一同は魂の抜けた人間の様に、ぼんやりとして日をおくつてゐた。特に、日常起居を共にしてゐた私達だけに、その感動は殊に激しかつた。

あゝ、今こそ、先生の爲された十数年間の成績の、如何に大且つ價值あるものだつたかが、はつきりと判る時が來たのだ。

私達が、先生の跡を偲びつつ、斯界の發達に貢獻する時、そこに先生の永久的安息所が見出されなければならぬと信するのである。　（7. 11. 5.）

REMINISCENCE OF A YOUNG OPTICIAN,

Late Mr. Kaname Nakamura.

Yasuaki Iba

A great sensation was aroused at the news in the "Osaka Mainichi," reporting the sudden death of Mr. Kaname Nakamura, of Kwasan Astronomical Observatory, which took place on the 24th September, at his private residence in Mano-mura, the lake-side village, near Ohtsu.

This incident is not only a blow to The Kyoto Imperial University, but deadly detrimental to the amateur astronomy, for no longer superb optical parts can be had from this most transcendental optician who had combined talents of Calver, Clacy and Metcalf.

He was born in 1904, as the second son of Mr. Atae Nakamura, who occupied the post as Village Master of Mano, a quiescent village looking down on picturesque Lake Biwa, and had a burning aspiration for the heavenly science

since in cradle. After graduating from Doshisha Chugaku, a missionary school in Kyoto, he entered Kyoto Imperial University Observatory, then situated in the town, as an Assistant-observer, at his eighteenth year of age.

Under the assiduous patronage of Prof. Dr. I. Yamamoto, the Director, he worked hard, day and night, and attained marvellous talents, especially in optical research. No one could, and hereafter, cope with him in the alacrity with which he made progress; and his bright future was much expected by all those concerned.

Recently, through the courtesy of the Director who always accepted his overtures re optical research, his laboratory could add a new polishing machine, capable of making mirrors or lenses up to 30" aperture, with full sets of accessories, which J. Nishimura & Sons constructed under his design.

He was very complacent with it, and was about to initiate 23½" f4 mirror after Yerkes type, and 13½" f5 Petzval, together with 7½" f4.5 triplet, and also 9" object glass for their guiding telescope, on behalf of the writer for use in asteroids and comet sweepings.

Plate No. 1 illustrates 10" f3.8 Reflector with 4" guiding telescope of the same type, owned by Mr. Shikuji Shibata, of Kyoto Imperial University, which was made by Mr. Nakamura, at the works of J. Nishimura & Sons.

The said mirror was ground and figured within a week at his leisure, and is rendering very satisfactory service to the owner. The largest object glass he made was 7½" aperture, as per plate No. 2, which he completed in 10 days, without neglecting his observation work. He made 4½" f4 triplet for his own use and actual time for its completion was 17 days. Just prior to his death he completed a Petzval lens with 5" aperture. Mirrors he turned out exceed 270 in all sizes.

The writer often saw Mr. Nakamura, dozing on a sofa by the side of of grinding machine, running by motor, replenishing energy for vigorous observations at night. He had no hobby whatever, save optical and observational works. On every Tuesday he came down from Kwasan to the town and his destination was always confined to the University, the works of J. Nishimura & Sons, to supervise assembling the parts of telescope and its testing, and the only recreation that tickled him was to get candy and sweets at a confectionery on his way back to the Observatory.

When franchised from his busy routine work, he was at the desk, writing letters in reply to inquiries re "*modus operandi*" of telescopes, pros and cons of refractors and reflectors, and mode of visual and photographic observations, etc., put up before him from amateurs now ubiquitous in the country. To give lectures to amateurs' meeting was his another pastime, and as was his motto "always at work," if time allowed he edited books, all of which are and will be *vade mecum* to all celestial zealots.

"Shumino Tentai Kwansoku" (Celestial Observations as Hobby)

Published in 1926

"Tentai Bohyenkyoo Tsukurikata" (Telescope making and the mode

of Observations) Published in 1929

"Tentai Shashinjitsu" (Celestial Photography) Published in 1932

The foregoing three are his publications and are in wide circulation.

The illustrious name, Kaname Nakamura, a laurel-crowned, young scholar, will be always in the mouth of all those in astronomical circles in this flourishing Island Empire through eternity.

At the request of Prof. F. E. Ross, of Yerkes Observatory, the writer handed him 2 copies of galactic photographs in August, and now they have become the last interview that will never occur again.

あ　　中　村　先　生

小　山　寛　一

關東の旅より歸つて、十一月號天界を開封し、いつも通り先づ目次を見ると、巻頭言に『中村君の死』、若しやと思ひつゝ披いて見れば、中村先生の御長逝!!

思へば十餘年前、山本先生が當地教育會へ御講演に來信の折、あの偉大なる體の中村先生が、青年期初期の朗かさをもつて、山本先生より紹介され、講演後の觀測には、非常に親切な言葉と態度にて指導された。誰かが恒星を望遠鏡で、見てなほ小さく見えると言つたら『然しハッキリ見えるでせう』と申されたのが今でも耳に残つてゐる。西郷南洲を思はせるような體の中に、

すばらしい根氣と、親切が充満してゐるように思へて、非常に印象深かつた。

愛する二兒を失ひて、悲痛やる所無く、茫乎として居た私は、當日の山本先生の御講演と、中村先生の觀測指導とにより、奇しくも天文に興味を持ち、以來持病の扁桃腺に悩まされつい、星を仰いで居る中に、不思議にも『無限の宇宙に走りゆく我が子を信じ、決して死んでは居ない』と信ずるようになり、爾來私は夜の空を仰ぐ毎に、なつかしの我が子に會へる喜びで満たされてゐる。斯くて、どうしても、ほしくなつたのが天體望遠鏡。中村先生にお話すると、丁度85ミリの反射鏡が近い中に出来るからとの御返事に、一日千秋で待つてゐた。到着の日の大喜びは家中で笑はれた程であつた。以來隔年に鍍銀をお願いして、今も私の愛兒として何所へでもついて行く。私をして失望のどん底より救ふの機會を得しめ、なつかしき望遠鏡を造つて下さつた中村先生。あゝ今は無し!!。果し無き宇宙の旅路に上られた先生を、余はまた先生遺作の望遠鏡裡に、なつかしの御後影を追はん。

中　村　兄　と　私

東　京　水　谷　新　樹

あの中村さんが……………!?

花山急報第10號を見ました時、恐らく何方でもさうでしたらう驚きと疑ひとで胸をつかれたのです。

これで中村さんとは到頭御面接は疎か、お便りを戴く機會も永久に失つて了ひました。何だ、知らないのか。さうです。少くとも中村さんは私を御存じなかつたでせう。が、私は既に兄に接して居たのです。彼の默々の内に兄のやうな親しさをこめ、沈着の内に忍耐強い熱を含む、中村さん!

此の故を以て兄と呼ばせて戴けるならば、兄には、大正十五年九月、科學畫報主催の觀測會が東京で催された折、其の指導者中に現當支部長五藤先生と共に居られたのです。當時一中學生であつた自分は、未だ本會の存在すら知らぬ、言はゞアマチュアの資格さへないやうな者でした。つまり本會を知るに先だつて兄に接するを得た譯です。而して之が入會の最大動機になつた

事は勿論であります。其の折の兄の印象が即ち前に述べた氣持なのです。

是迄、内外科學界の偉人、恩人と目される方々の訃報も屢々耳にしました、さういふ方々に對して、自分は、同じ追憶、慕追の中に、どこか「何々の父」とか「をぢさん！」と呼びかけたい様な氣分が含まれて居たものです。所が、兄の場合にはもつと、ぐつと親しい感じです。「兄さん！」です。

それに、今年は何といふ年でせう。自分として、趣味と實際と研究との三方面で、心私かに定めて居ました最も優れた指導者を、相次いで失つたのです。然も、其の何れの方々とも遂に御文通すらし得ない内に。

趣味の昆蟲界から横山桐郎博士を、實際方面のローマ國字論者田丸卓郎博士を、そして遂に、觀測研究家中の珠玉、中村要兄をも。噫！

最後に、未知の兄に對して、何が、自分を斯くも追憶、追慕の念に切ならしめたのか、自分でもわかりません。

實は、貴い紙面を、私輩が塞ぐべきもあらずと、今迄忝へて參つたのですが、適々本日明治の佳節に當り、神宮參拜の途、兄に始めて接した、彼の觀測會場を、此の眼、此の足で觸れて參りました結果、急に憶ひを此處に記させて戴きました次第、甚だ取止めもない點は幾重にも御容赦願ひ上げます。

(附記) 花山急報に接するや、兄とも關係淺からぬ雜誌科學畫報を創刊號より取出し、兄のお筆を取られた號を取分けて見ました所、十有八冊、毎年天文に關する號には殆ど皆兄の御名を見出します。

火星—中村、流星—中村、彗星—中村、反射鏡—中村、等々、の聯想は、會員の皆様は勿論、少しでも天文觀測に興味を持つた者凡てが、今後とも繰返す憶ひで有りませう。(1932. 11. 3. 記)

中村さんと宮本君と私

大橋登潮

中村さんと宮本君

宮本君ほど中村さんを尊敬して居た人は無いと思ひます。中村さんの碩學に、そしてその優しい人格に、寂しい少サイエンチストは尊敬を通り過して

中村崇信者になつて居りました。宮本君がいかに中村さんを慕つて居たかは私宛の近信でもわかります。

『——僕は中村先生が亡くなられてから、どうしても氣が進みません。——先生が生きて居られた時は別に先生の事を考へるでもなし、唯尊敬して居ただけです。けれども亡くなられた今は、僕ははつきり申しますが、他の誰よりも先生に對して忠實です。毎日先生の事を思ひ出さない日とはありません。今僕の讀みつゝある本もフランスの天文家フランマリオンの著書「死と神秘」です。僕は夜中に恐い乍らも毎夜讀み續けて居ります』。

熱心な宮本君はほんとうに忠實な人であります。新聞で中村さんの亡くなられた記事を見た時「しまった！宮本君も殺したか！」と非常に心配しましたが、宮本君からの手紙を見て健在だつた事を心から喜んだ事でした。そして宮本君に、「第二の中村さんに」、「——地下の中村さんに喜ばれる人になれ」と勵して居ります。

中村さんと私

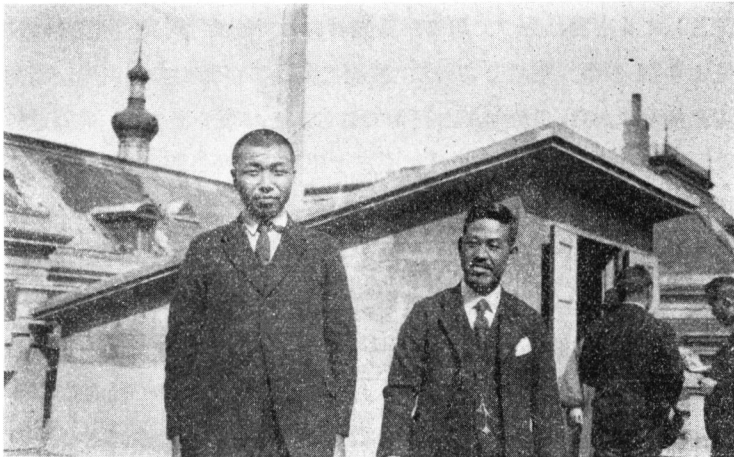
私が始めて大學の天文臺をお尋ねした時に案内して下さつたのが中村さんでした。優しい、そして朗らかな親切な中村さんの姿は初對面の時から私の心の底深く残りました。それから6年の間、大學で、花山で幾度もお會ひしました。或る時などは餘り話に花が咲き過ぎて時間の立つのも忘れて仕舞ひ、時計を見て、びつくりして雨の花山を自動車で降りて驛へと急いだ事もありました。7月の初お會ひしたのが最後になりました。丁度其の時改發さんの寫眞レンズを磨いて居られる時で、その美しいレンズを見せて戴いて種々とお話を聞きました。龜井さんに送られて花山を辭する時、研磨室でベットにあうむけになつて眠つて居られる中村さんに窓越しに聲を掛けましたが、聞へなかつたのか、安らかな寢息がもれるばかりでありました。それから3ヶ月後、中村さんの死を聞いた時、どうしても信じる事が出来ませんでした。どうぞ事實でなかれかしと祈つて居りましたが、そのかひも無く悲しい事實となつて表れ、私の心にいつまでも——悲しい影を残して仕舞ひました。大きな體、そして體に似合ぬ優しい聲、いつも朗かな笑顔、メツキのため黒くなつた爪、それらが今も目の前にチラ付きます。不切の明日にせまつた夜おそく、亡き中

村さんの思ひ出の糸をたぐりつゝつたない文を綴つて見ました。(11月4日夜)

中村氏の憶出

五藤光學研究所 五藤齊三

私が中村氏の逝去を聞いたのは九月二十八日であつた。其日臺灣總督府臺中病院長津野田醫學博士が來訪せられた。同氏は豫てから熱心な天文愛好家で、7.5匁赤道儀を愛用して居られるが、更に15匁赤道儀を自作せらるべく其對物レンズを私の手許で作つて居るので、今度官より外國出張を命ぜられ、外遊



大正十五年三月二十八日・東京丸ノ内商工獎勵館屋上ニテ

(同好會支部懇談會場) 中村氏 五藤氏

の途次、其レンズを試験の爲め立寄られたのであるが、同氏が臺灣より上京の途中、瀬戸内海航行中、尾の道で買った新聞により中村氏が不慮の死を遂げられた記事を見たと言られたので、愕然として驚いたのである。私が最近中村氏に御目に掛つたのは、本年一月末花山天文臺に御尋ねした時である。其後手紙の往復は數々あつたが、八月初め以後はお互に御無沙汰をして居て、最近の消息は知らなかつた。然し平常から中村氏の周囲の事情性格等を可成よく知つて居る私は自ら死の途を選ばれた事をどうしても信ずる事が出来なかつた。それで津野田博士に對し、それは何か記事の見間違ひでは有りませんかと反

問して見たが同氏は、自分は醫者の立場上生死に對しては普通人よりも冷靜に考へ得るつもりで有り、且つ天文愛好者として中村氏はよく知つて居るので、非常な關心を持つて其記事を見、且つ稀に見る偉材を若くして失つた事を心中深く惜みつゝ上京したのであつて、確に夢では無い。但し其記事の眞偽は知らぬとの事であつた。そこで私はよく中村氏の記事を掲載する科學畫報社の仲摩主幹に電話をかけ、此悲しむべきニュースを傳へると共に其眞偽を知らざる哉と問ふて見たが、同氏も全く初耳であり、且つ八月中に一寸花山に行き中村氏に御目に掛つたが其時の印象より考へても到底信ずる事が出来ぬ、但し新聞記事に現れて居たとすれば東京の新聞社でも紙上に掲載せぬ迄も資料として其事實は分つて居るかも知れぬので、早速二三新聞社に就き調べて見ようとの事で電話を切つた。程經て其返事があつたが何處の新聞社も其事實を知らぬから、多分何かの誤傳で有らふとの事であつた。次で中村氏の著書發行所である恒星社の土居氏に手紙を出し、同様の問合せをして置た所、翌朝電話が有り、自分も全く其事實を知らず、殆んど信ずる事が出来ぬ、現に二十二日附の新聞に記事が載つて居た（之は私が津野田氏に聞き違つた事と思はれる）と云ふに、自分の手許へは二十四日附の手紙が來て居る、恐らくその新聞記事は誤であらふ。但し廿四日附の手紙には、少々病氣の爲め自宅に歸り靜養中と書かれて有り、自分が八月に花山でお目に掛つた際にも神經衰弱の氣味はあつた様に聞いて居るから或は變事未遂の様な事は有つたかも知れぬが、逝去の事實は先づ無いと思はれるとの御話に、私も胸をなで下して居たのであつた。然るに其翌々日更に土居氏より矢張り逝去せられた事が事實であるとの報道が、正式ではないが確實に有たと知らせて下さつたので今更ながら哀悼の意を深くした次第である。次で十數日後山本博士の御上京あり、親しく死に到りたる周圍の事情を拜聴し、只々人生行路のまゝならざるに長嘆之を久ふした事である。

かへり見れば、私の宅に本會の支部を設けたのは大正十四年十月七日で此時御上京中の山本博士を煩し講演會を開いた。又同月二十四、五兩日には大阪に於て本會創立五週年記念總會が開かれ、私も在京の一會員として列席し、初めて諸先生方にも御目に掛つたが、當時中村氏は一年志願兵として入營せら

れて居たので未だ私は其風手に接する事が出来なかつた。越えて翌十五年三月に山本、上田、中村諸先生が上京せられた際を利用して當時私の勤めて居た日本光學工業會社に於て同月廿二日より五日間に亘り在京會員の爲めに此等諸先生を講師として講習會を開いたが、此時初めて私は中村氏の偉大なる風格に接した。此講習會に於て中村氏は「反射鏡の製作とテスト」と云ふ講演をせられて、搖籃時代の反射鏡愛好者に非常なる興味と刺激を與へられた。此講習會に於ては、私共の主張で、從來秘密主義を持して來た日本光學の工場内を限なく開放して、最終日には諸種の光學實驗をも供覧したので、東京天文臺の早乙女博士も本會々員として來觀せられたのであるが、當時反射鏡の研究より製作に入られた計りの中村氏に取りても専門のレンズ工場の設備は餘程珍らしく感ぜられたものと見え、非常なる熱心を以て詳細に見學せられ、尙其上に研磨用材料たるピッチ、金剛砂、紅柄、ピッチ網等の分與を請はれたので、私の手許より御送りした事である。同氏は之で初めて實際製作の準備が完全したと喜んで來られた。其後同氏に取りては此等新らしき材料に就いて獨特の研究を積まれ、タールピッチと石油ピッチの比較や、サイフォンに依る金剛砂の分離法の發見、本邦産優良紅柄の選定、ピッチ網に漁網の利用等、之等小材料に就いても悉く新境地を開拓せられて私等を多々教へらるゝ所が有つたのには敬服した事である。

其後十五年九月に私の考案した太陽黑點投映機を科學書報社が東京原宿の島津科學普及館に於て公開實驗するに際し、中村氏は態々自作の十一センチ半の反射鏡を持つて上京せられ、此催を助けて下さつたが、此反射鏡は確か同氏作品中第三番目の物で有たと記憶する。數百の來會者も、ツァイス製や日本光學製の屈折鏡に伍して些の遜色もなき此反射鏡の性能に驚嘆した事であるが、恐らく多くの來會者も完全なる反射鏡の映像を眺めたのは此時が初めて有つた事と思はれる。爾來同氏の作られる望遠鏡に附屬する接眼鏡プリズム、其他小型のレンズ類は殆んど皆私方より供給し、又練習の爲に作られた反射鏡を私の手に依り多數希望者に分與して同氏の研究の一助とする等、將又私方にて作つたレンズ類を檢查批評及指導して下さる等、事業上に於ても經濟を度外視した關係を願つて來た事である。

其後毎年一二回は必ず同氏の上京を迎え、或時は當時お茶の水に在つた文部省の東京科學博物館の講堂で同氏單獨の公開講演會を催した事もあり、或は私の宅で支部會員の懇談會をを催した事も一再では無かつた。或時の懇談會後の觀測會では80耗屈折鏡の視野中へ海王星を入れて下さつて、來會者が代る代る覗いたが溷濁せる東京の天では誰も満足には見えず、今更乍ら學界に定評の有つた氏の銳眼に驚いた事も有つた。又或時の懇談會に於ける來會者中に目下南米ブラジルに在住せらるゝ南米支部幹事與謝野修氏が居られたが、同氏は元宮内官として、永年宮中に奉仕せられた所謂「大宮人」の出だけに、其舉措言語極めて典雅なるに反し、中村氏の素朴にして天真爛漫なる、殆ど自然人の如き言動が眞に奇妙なる對照を爲したる等の思ひ出も残つて居る。遠く故國を離れて居られる與謝野氏も本號に依り必らずや感慨深く當時を追想せらるゝ事であらふ。又中村氏は偉大なる體格をして居られたので、到る所夜具の短きを託された由であるが、私宅でも泊られる度に一枚の蒲團では足らず大笑ひをした事だが、同氏の御話に依れば、叔母様の御宅に行く度に子供が「大きな人が來て恐ろしい」と云つて泣くのは閉口すると云つて笑つて居られた其程其心根の優しきに似ず、其卓越せる頭腦の如く身體も又偉丈夫であられた。數年前の夏休み中、令弟を叔父上の御家に養子とせらるゝ爲、連れ來られたとて來泊せられ、其後御親父より御禮狀を頂いた事で有るが、其御文中、中村氏最近の學界に於ける業績を列舉して氏の將來に滿腔の期待と信賴とを集めて居られた様で有るし、中村氏亦令兄が先年醫家として大學を出られ御宅で開業後間も無く逝去せられて以來、家を繼ぐべき責任を明らかに感ずると云つて居られたので有つて、個人としても永く健在を祈らねばならぬ方では有つたのに、何故に自ら生を斷たるゝが如き事に成つたか、又學界に取りては得難き大天才として等しく其將來の研究に期待して居たのであるに、天は何故に天壽を與へなかつたか、洵に返す返すも残念至極である。

私は過去七年間に亘る交友として茲に衷心より中村氏の逝去に哀悼の誠意を表す次第である。

以　　上